哲學研究　第百六十九號

ディルタイの倫理學思想

田中熙

ディルタイの多方面な哲學的仕事は要するに、歴史的社會的な現實在における諸々の精神的産物の生成發展を理解すること卽ち生を生自身からして理解すること、又かゝる理解において成り立つ樣々の精神科學を所謂歴史的理性の批判によつて基礎づけること、是らのことに向けられてゐた。一言で云へば精神科學の哺育と基礎づけとに集中されてゐた。例へば彼の全集編纂者の一人であるグレテユイゼンが「凡ての彼の著作は結局(精神科學)序論の第一卷に第二卷を續刊せしめることに向けられてゐた」(W. Dilthey; Gesammelte Schriften. Bd. I, S. V. Vgl. auch Bd. VII, S. V)と云つてゐる如くに。だから彼において倫理思想を尋ねることは或は彼の哲學思想における的外れを問題とすることでしかないかも知れない、しかし乍ら元々宗教的道德的な動機からして發足し「道德的なるものと宗教的なるものとが彼の哲學的欲求にとつて中心である」(Bd. V. G. Mischs Vorbericht. S. XXIII.)と云はれてゐることを省

みるならば、後に至つて愈明かに理論と實踐との合一相關を說き「論理學と倫理學との結合による哲學の新らしき基礎づけ」(a.a. O.S.XXVII)を企てた處の此の生の哲學者が、倫理學について如何なる思想を懷いてゐたかを追究することは決して無益なことではないだらうと思はれる。

しかし乍ら結局は一つの準備的なもので甘んじようとする茲では、主にディルタイの初期において現れてゐるところの倫理思想の考察にのみ止めよう。材料としても、亦固有の意味における倫理學に關係あると思はれる次の樣な諸論文(それは何れも彼の初期の作にかゝる) Versuch einer Analise des moralischen Bewusstseins. 1864 (G.S. Bd. VI), Ueber das Studium der Geschichte der Wissenschaften vom Menschen, der Gesellschaft, und dem Staat. 1875 (G.S. Bd. V), Einleitung in die Geisteswissenschaften. 1883 (G. S. Bd. I), Uebe rdie Moeglichkeit einer allgemeingültigen pädagogischen Wissenschaft. 1888 (G. S. Bd. VI)などに限られる。その外に尙最も初期のものである「シユライエルマツヘルの倫理學原理について」(1864)や或は最近の出版にかゝる「ディルタイ、ヨーク伯間の書簡往復集」なども興味あると考へられるけれども未だ見る機會を得ない。又茲におけるよりもより廣い又より周到な立場にとつては極めて重要な意味をもつべきところの心

理學や詩學に關する或は其他の諸論文は此の準備的な立場にあつては大むね省略せられる。

以下の叙述は三節に分たれ、第一節第二節は上掲一八六四年の就職論文を紹介する。しかも結末において囑望せられるべき次のより廣く深い考察に對する準備であるといふことを念頭におく故に、その中でも特に基礎的な思想又ディルタイの後の發展に意味ある思想のみが主として叙述せられる。第三節はその外の上掲諸論文に現れてゐるところの主要なる發展方向を第一節との關聯において叙述する。吾々はディルタイの初期の倫理思想から如何なることを學ぶことができるか。

一

ディルタイは上に擧げた一八六四年の論文の冒頭において「世界の苦惱に對する嘆きは息まない……それを救ふ爲の少く共外觀上は無制限な方法は人間意思へ働きかけることである、かゝる働きかけをなすものは教育、宗教、社會の改善的整備――さうして最後に吾々の道德的意識への沈潛である、何となればこゝにおいて初めて吾々は吾々の生命を導く普遍妥當的なもの確實なものに出會ふからである、偉大なる哲學者達はその倫理的理論においてかゝる働きかけに努力した」(VI. 1) と云つ

てゐる。さうして彼はプラトーやアリストテレース、スピノザやカントの倫理思想におけるそういふ努力を例示してゐる。「倫理學は生命に對して改善的意味 reformatorische Bedeutung を持つてゐる」(VI. 4)。倫理學は生の要求から生れ出で生への働きかけに戻るべきところの生との密接な關聯にある學である。彼によつては先づ倫理學は斯樣に極めて實踐的な性質をもつ學として捕へられてゐる、彼は倫理學に對して左樣な實踐的な「生への作用」を期待してゐるのである。此の思想を吾々は最初に注意せねばならぬ。何となればそれは後に至るまでもディルタイに續いてゐる思想であり、又倫理學のみならず延いて精神科學一般にも適用される思想であるからである。

然らばそんなにも生への實踐的な作用が期待されてゐる倫理學は一つの學として如何にして如何なる方法によつて研究されるべきであるか、倫理學の方法論についてディルタイは如何に考へてゐたか。倫理學は生の改善を目的とする、しかし乍らだからと云つてそれは唯々人間理想の構成や義務の說示にのみ奔つてはならない。もしそうするならば「人々は倫理學を全く講壇に委し去り、之れからも滅び果てようとする」((VI. 2) だらう。そこで「生へ働きかけんとする倫理學の要求とかゝる

要求を離れた純粹な研究慾とは共に等しく凡ての命法凡ての理想の根柢としての在るがまゝの事實の考察 Untersuchung dessen, was ist, als des Fundamentes aller Gebote und aller Ideale に驅り立てる(VI, 2)と彼は云ふ。倫理學は與へられた事實を以てその考察の出發點とせねばならない。ディルタイによれば「あるところのものゝ中にあるべきところのものに對する根據が、現實の中に規則の根據が見出されねばならない」(VI, 69 u. 62)のである。

では倫理學的命法理想の確立の根據として先づ探求せられるべきその事實とは如何なるものであるか。生への働きかけを目的とする倫理學にとつてはそれは云ふ迄もなく生の事實或は人間意志の事實でなくてはならぬ。卽ち意識の事實でなくてはならぬ。かくして倫理學は道德的意識の分析的考察を以てその基礎的出發點とせねばならぬ。さうして又それがディルタイの最初の倫理學的論文の標題として選ばれるのである。此の思想も亦吾々は、彼の方法論として更には彼の一般的な哲學的立場として注目せねばならぬ。彼は初めはミッシュが云つてゐる樣に自然主義的な立場に(V. XXXIV)、或はディルタイ自身が回顧して云つてゐる樣に實證主義的な立場に立つてゐる、それは何よりも先づ與へられた事實――同時にカント

の批判主義的精神の下にもあつたディルタイにとつては與へられるとは意識に與へられるのであるが――を尊重し、それの叙述分析に基づいてのみ理論や法則を樹てんとする立場である、さうして後に至つて明確に自己省察の立場として或は内在性の原理現象性の命題として特色づけられたところのものゝ萠芽である。それを萠芽であると云ふわけはディルタイの此の初期の論文においては未だその意識事實が主として主觀的個人的な意識事實と考へられてゐたからである。

倫理學が道德意識の分析から出發することはディルタイによれば、凡ての心理學的形而上學的な前提から離れ去ることを得しめ、今迄の倫理學が陷つた種々の困難を解決せしめ、又その基礎づけに對する複雜な考察を不用ならしめることができる。「それ故にそれ(道德意識の分析の企て)は凡ゆる倫理學にとつて必然的な前提である、何となれば絶對的責務、傍觀者の判斷、當爲ですらもより近く觀察するならば極めて困難な問題たることを示すからである、今迄の凡ての倫理學においては豫めまづ是らの出發點が果して道德意識の全形式を實際完全に又應はしく表現してゐるかどうかと云ふことが問はれねばならなかつた」(VI,3)と彼は云つてゐる。「道德意識の分析はしかし當爲、絶對的責務、傍觀者の判斷、約言すれば道德的諸措定――それらは

樣々の體系において樣々に認識原理として現れる――に、道德形式の完全なる分析における一つの基礎を與へるべきのみならず、又此の基礎自身をも變形せしめる」ebenda)。斯樣にして道德意識の分析が倫理學にとつて唯一ではないけれどもしかし確實な出發點を與へることゝなるのである。

ディルタイの倫理學的考察の方法、出發點は今や規定せられた、それは事實の尊重、意識事實からの出發である。この出發點をディルタイはヒュームとカント(「道德哲學原論」の第一節)に負ふてゐると告白してゐる。一般に此の一八六四年の論文は特にカントからの影響が著しいことを吾々は認めることができる。しかし乍ら茲においても已にディルタイはカントとは違つて第一に、同じく道德意識の分析をなすにしてもそれを、實踐理性の事實とは考へないで吾々の內的經驗innere Erfahrungとし、實驗Experimentに類似した處置によつてその視野が擴張されねばならないこと、第二に道德意識が精神世界の中の一構素であり、從つてそれの分析がなされる爲にはかゝる具體的關聯からして抽象分離されねばならぬといふこと、を注意してゐる。是らの顧慮はカントには無かつた事である。人間行爲は精神的世界の關聯中にある一つの經驗事實であり、道德的見地の外に法律的美的等の見地からしても觀察せら

れる。倫理學は斯樣な人間行爲について特に倫理學的な見地からして道德的なるものを分離せねばならぬ。卽ちそれは行爲において意志の本體と認められる動機Motiveだけについて考察する。「行爲自身は道德的考察にとつては、唯それにおいて動機が認められるところの素材たるに過ぎない」(VI. 7, Vgl. auch V. 67 u. I. 61)のである。動機(さうしてそれとの關聯にある行爲、性格)にのみ道德的なるものがある。動機が道德意識の內容を形づくつてゐるのである。(VI. 28, 9)

道德意識の內容としての諸々の動機はしかし單なる動機ではなくて道德的性質を帶びた動機でなくてはならぬ。卽ち道德的判斷moralische Urteilが下されてゐるところの樣々の動機、或は動機に對して下されてゐるところの樣々の道德的判斷でなくてはならぬ。「道德的判斷とはかくてその動機が行爲的意志の本體を現はす限りにおける行爲の考察」(M. 9)、であり「道德意識とは一精神に下されたる凡ての判斷の總體、しかも單なる總體ではなくてその內的關係において觀られたる總體である」(ebenda)。ディルタイはかくの如く道德意識を分析してそれを道德的判斷の總體と考へる。さうして道德的判斷とは彼によれば第一に人間行爲に對して外的に傍觀者からして下される場合と、第二に內的に行爲者自身からして當爲の力又は責務の

感を伴ひつゝ下される場合との二つがある、道德的なるものは此の二つの形式において現れ存してゐる。カント及びフイヒテは道德的なるものをその後者の形式において卽ち動機づけの中に生き働いてゐる力として捕へ、英國倫理學者及びヘルバルトはそれを前者の形式において卽ち外から他人の行爲に働きかける力として捕へた、がしかし兩者共に道德的なるものを唯一の形式においてしか考へなかつたからして何れも一面的となつた、デイルタイは此の事を繰り返し述べてゐる。(VI, 10-11, V, 69,I, 61-62)だから倫理學は彼によればこの二つの形式における道德的なるものの卽ち道德的判斷或は道德的措定 moralische Prädizierung を共に考慮して互ひに相補はしめつゝ考察すべきである。

最後に道德意識の分析からして抽き出されて來た此の道德的判斷を、デイルタイは一つの推理であると考へる、卽ち普遍的大前提の下に特殊な小前提を包攝させることによつて得られる推理であると。その普遍的大前提とは何であるか——箇々の道德的判斷がそれに包攝せられることによつて一般に道德的と呼ばれるに至るところの形式的原理である。特殊的な小前提とは何であるか——道德的意識の內容として含まれてゐる諸々の動機卽ち道德的判斷或はその集合としての世故

Lebenserfahrung 世智 Lebensweisheit である。道德的判斷はこれら普遍的な形式と特殊的具體的な內容との結合である。從つて又それの總體としての道德意識も亦形式と內容との二つの契機を含み、それに應じて形式上からと內容上からとの「二つの考察方法」(VVI.9)をもつ。デイルタイは斯樣に考へて道德意識を形式上、內容上との二つの觀方からして分析する。然らばその兩者においてそれ〴〵如何なる原理と根據とが見出されるか。

二

(I)道德意識を形式上からして分析考察するときは如何なる原理が得られるか。

デイルタイは道德意識の形式的規定においては特にカントから多くを負ふてゐる。彼は云ふ「もし吾々が今や更に進んで此の道德的措定は普遍的大前提の上に基づいてゐる、かくて普遍性といふことが吾々の眞に道德的な行爲を終極的に規定する動機の性格であるといふことができるならば、道德意識の形式に關する吾々の考究は殆んど完了されたと同じであらう」(VI. 12)と。道德意識の形式をなすものは普遍的法則性にある、道德的なるものが道德的であるのは經驗的に與へられる何か他の目的の故にではなくして、實踐理性の先天的綜合性においてその根據をもつてゐ

る、斯樣に彼は一應はカントに基いて考へる。しかし乍らこゝでも亦彼はカントのみに止りはしないで一部はショウペンハウエルのカント批判に從ひつゝヒユームの經驗論的倫理說或はロッチエの幸福主義的倫理說をも取り入れて、之らとカントとの調和を彼は說かうとするのである、それがデイルタイの眞意であると考へられる。卽ち道德意志の形成的根據としては唯に實踐理性の先天的綜合性のみならずその外に、吾々の衝動、欲求、情慾等を內的に動かすところの價値感情或は道德的感覺も亦共働してゐる。「實踐的理性も感覺 Empfindung も各々他から分離せられては意志の綜合の根據となることはできない……感覺と理性とは合致點を持たねばならない、感覺は理性にとつて異質的であること卽ち理性を缺いてゐることはできない、理性は恐らく感覺において卽ち快、不快又價値感情の中において働いてゐねばならない」(VI. 20)。理性は單に形式的原理たるに止まらず「形成目的 gestaltender Zweck として吾々の精神中に活動してゐねばならない」(ebenda)と彼は說く。

更にデイルタイにとつては理性よりも道德的感覺の方が道德意識においてより基本的である。「吾々の道德的判斷の根柢にある判斷主觀としての感覺は……その中に普遍的理性を含む如くに自分の中からして理性を發展せしめることができる、

―かくしてそれが道德意識のまづ現れる處の形式である」(VI.30)。だから又「個人は彼自身の感情狀態の中に存しないところのものを生の目的として定立することは決してできない」(VI.70)のである。道德意識はかくして實踐的理性と共働してゐる道德的感覺をその形式的根據とする、かゝる感覺の先天的綜合性によつて道德的なるもの一般が形式的に基礎づけられるのである。さうしてデイルタイはかゝる感覺の總體、しかも目的體系をなしてゐる總體をヘルバルトに習つて道德的組織 moralische Organization と名づける。吾々は凡てかゝる道德的組織を「自然的に一般的に又不變的に」持つてゐる。それは吾々の存在の諸目的の體系である。だから吾々の存在の目的を目的とすべきところの道德的判斷の綜合性は此の道德的組織において「證據と實證と認識根據」(VI, 44)とを得るのである。しかし道德的組織についての更に詳しい內容的解明は道德意識の內容的分折に進んで始めて得られるであらう。

道德意識の形式的分析において道德判斷の先天的綜合性の基礎を吾々の中なる道德的組織に見出したところのデイルタイはかくして次にはそれの內容的分析へ移り進んでゆかねばならぬ。何となれば「吾々の道德意識に元々矛盾してゐる假定、卽ちそれの單なる形式の中にそれの義務性の根據或はそれからして行爲するとこ

ろの動機が置かれてゐるかの樣な假定から分れて、吾々は今や生自身へ換言すれば行爲的世界を造り上げてゐる動機へ向」(VI, 28)はねばならないのである。

(II)道德意識を內容上から分析考察するときは如何なる原理根據が得られるか。

道德意識の內容とは先にも述べられた樣に吾々の生を形成する行爲の裡にその規定者として働いてゐるところの諸動機のことである。かゝる諸動機は生の世界において勿論「測り難く廣い範圍をもち又限りなく錯雜して」現れる。又眼前に現れてゐる人々の複雜な行爲からしてその心內に隱れて働いてゐる微妙な動機を推定することは屢〻困難でもある。それ故に古來の倫理學者達はそれら複雜な道德的諸動機の內容的原理として或は快樂を、或は好意を或は同情を說いてゐる。しかし吾々は、之らの原理の確立の前に豫め、抑々動機とは如何なるものであるか、又如何にして如何なる意味で動機が道德意識の內容的原理となるのであるかを問はねばならぬ。かゝる問に答へた後で初めて如何なる動機が根本的な道德的動機であるかを決定し得るであらう。

デイルタイによれば道德的動機とは吾々の意志を決定し吾々の行爲を「動かす力」を持つてゐねばならない、道德的動機のかゝる力によつて「精神を滿してゐる激情的

な欲求、衝動の只中において道德的なるものが生ぜしめられる」(VI, 42)のである。道德的動機は又自らを實現せんとする努力Strebenとして現れそれによつて道德的世界を形成する。さうして最も大切なことは道德的動機はそれ以外のある他のもの例へば快樂の追求を自らの運動、努力の目的とすることゝなしに自己自身を目的として働くところのものであらねばならぬ、卽ちそれは自己自身の先天的綜合性に基いてのみ道德的動機であるのである、道德意識の形式と同樣にその內容も亦その「綜合的要素」synthetische Elemente (VI 39, 42)において道德的であらねばならぬ。吾々の動機は先天的綜合の要素においてのみ價値の世界Welt der Werteと結びつき道德的性質を帶びるのである。何となれば「それ(綜合)は恐らく吾々の意志が道德的である限りにおける意志の實踐的なVerhaltungsweiseである、意志はかゝるVerhaltungsweiseを通じて價値の世界に關係する」(VI, 43)からである。デイルタイは此の實踐的行動樣式を實踐的範疇praktische Kategorienと呼んでゐる。「それ(實踐的範疇)はその下で意志と價値の世界とが道德的性質を帶びて相互に結びつけられるところの綜合的要素を含んでゐる」(ebenda)。

吾々はかくしてデイルタイの倫理學思想において極めて重要な實踐的範疇の概

念を學ぶのである。吾々の意志或はその本體としての動機はかゝる綜合的な實踐的範疇を通して自らを道德的に形成する。道德的に形成するとは自分を價値の世界と結びつけることである。ところで意志が自分の力によつて價値の世界と結合し得る爲には豫め價値の世界は意志の或は精神乃至生の一契機として生の中に含まれ働いてゐるのでなくてはならない。それだから價値はディルタイに依れば實踐的範疇を通して生の中から現實に生み出されるのである。先にも述べた如く彼は倫理的命法、理想の根據として生の事實を考察せねばならぬとするのであるが、その生の事實が今や實踐的範疇を通して自己形成的活動をなす生として明かに認識されるのである。吾々の生が、そのVerhaltungsweiseが道德的價値を生み出すのであり、後者は前者の中に含まれてゐるのである。それ故に「倫理學は人間精神についてそれが先天的綜合に基づいてその存在の主要形式を如何に形成するかwie er auf Grund apriorischer Synthesen die Hauptformen seines Daseins gestaltet を觀」(VI. 43)ればいゝわけである。此の思想は注目されないで好いであらうか。吾々は此の思想こそ卽ち實踐的範疇の概念こそディルタイの倫理思想において最も基本的な概念であると考へたいのである。ディルタイも此の概念において「倫理學の Horizont が擴張せられる」

(ebenda)と云つてゐる。

扨て以上の事が確定せられるならば意志の如何なる根本動機が道德意識の內容的原理であるかを擧げ示すことができるであらう。何となればそれは吾々の意志の主要な Verhaltungsweise 或は實踐的範疇の樣々な綜合の仕方を擧げれば好いわけであるからである。デイルタイはかゝる綜合の樣式として三つを數へてゐる、第一は個人の內的價値の開發、第二は他人の悲喜及び價値に對する好意、第三には自他の價値に對する各人間の相互的義務づけである、此の三つの綜合的形式によつて吾々の意志は價値の世界と結びつく。さうしてかゝる綜合樣式によつて實現せられるところの價値は第一には完全性 Vollkommenheit、第二には好意、第三には公正 Rechtschaffenheit である。(一八八八年の敎育學に關する論文にては道德生活の原理として同情、完全性への努力、幸福、さうして相互的義務づけ等を擧げてゐる。(Vgl. VI. 57)。)先に形式的分析において到達した道德的組織とは思ふにかゝる諸々の價値を內容として含むところの道德意識の先天的な形式或は普遍的な構造を意味するのであらう。とも角それらの根本的諸動機をその內容として含んでゐることは明かである。

しかし此らの道德的諸原理或は價値についての說明、又それらの中でも特にディルタイによつて重んぜられ又吾々の興味をも引く完全性の價値についての說明に、是れ以上立ち入ることはしないでおかう。何となれば初めに約束された樣に茲ではディルタイについてのより廣汎な又周到な考察に對する一つの準備として、彼の倫理學思想の中でも特に基礎的なもの彼の發展にとつて意味深いものゝ省察に限られるべきであつたからである。一八六四年の就職論文に關する叙述は之れで終つて次には是れと關聯せしめつゝ後なる思想發展を述べることにしたい。

三

前二節に互つて叙述せられたディルタイの倫理學思想は一八七〇年代以後の彼の上揭諸論文において如何なる方向に如何にして發展せしめられたであらうか、之れを前の叙述と關聯せしめつゝ省みたいと思ふ。

已に述べられた樣にディルタイの倫理思想における本質的なものは、第一に彼は倫理學を以て生へ働きかけるべき一つの極めて實踐的な學として捕へたこと、第二にその爲には倫理學は生の事實、意識の事實の分析考察から出發しそれを基礎とせねばならないとしたこと、第三には實踐的範疇の概念において倫理學的諸原理は生

の形成活動の中から生み出されると說いたことなどであつた。此らのことが前節において叙述せられ注意せられた。この基礎的な諸點がその後なる諸論文において如何に發展されてゐるか。

先づディルタイはかの就職論文においては倫理學がそれに働きかけるべき生、從つてそれの分析から出發せねばならない生の事實、意識事實とは、未だ主として抽象的な人間意思の事實、或は個人的主觀的な意識事實としてしか解せられてゐなかつた、之れに對してその後なる諸論文はます〳〵具體的客觀的な方向に進んで行つた、さうしてその生或は生の事實を以つて實に歷史的社會的な聯關の中にある生或は事實として明かに捕へるに至つたと考へられる。此のことが第一の又最も根本的な發展であると思はれる。卽ち道德の事實又は現象は單に個人的主觀的な事實ではなくて歷史的社會的な事實である。從つてそれを對象とする倫理學は單に個人的主觀的な道德意識の分析のみならずそれと共に歷史的社會的な事實の分析的考察をも基礎とせねばならない。又それに應じて倫理學は單に主觀的な人間意志に働きかけるのみならず同時に歷史的社會的實在にも客觀的に働きかけると說かれるに至つた。一言で云へば道德及びそれを對象とする倫理學の歷史的社會的聯關

性と、さうしてまた歴史及び社會の道德的生命性とが愈〻高調されるに至つたのである。

グレテユイゼンによつて「デイルタイの全問題定立にとつて意味深い論文」(I. S. VI)と云はれてゐる一八七五年の論文「人間、社會及び國家に關する學問史の研究について」はかゝる發展の口火を切るものである。その中で倫理學について語られてゐる、「道德哲學は現今その存在を尙たゞ講壇において曳きづゝてゐるばかりであり茲においてすらも滅び果てようとしてゐる。しかし乍ら之れは自然の結果である、倫理學は他のどんな類似の學よりも長い間、遙かに包括的な又最も客觀的に取り扱はれ得るその經驗材料、卽ち道德的狀態及びそれに結びつけられてゐる理論を自分の研究から除外してゐたのである」(V. 33)と。さうして「だから道德哲學をその衰頽から更生せしめる第一の條件は歴史的事態を取り入れてそれを比較的方法に從つて利用することである」(V. 33-34)と云つてゐる。倫理學は歴史的事實をその考察の中に導入せねばならない。

まづ第一にその爲には倫理學はその對象である道德現象が一つの歴史的社會的な事象であることを明かに知らねばならぬ。後のデイルタイは此の事について至

るところで力說してゐる。「道德の體系は樣々に段階づけられ歷史的發展によつて成立し場所によつて種々に樣式づけられて自立的に存在してゐる」(V. 71, I. 61)。道德は法律や經濟と共に「社會の實踐的生 praktische (od. handelnde) Leben der Gesellschaft」(V. 58, 59)として或は「社會の秩序及び組織の構素 ein Bestandteil der Ordnung und Gliederung der Gesellschaft」(V. 70)として存してゐると共に又「歷史的生命の全內容によつて規定せられてゐる、それは歷史的に生じ歷史的に制限せられてゐる」(VI. 59)。さうして歷史的社會的な聯關の下において道德的事象は慣習 Sitte 或は輿論 öffentliche Meinung として存在してゐるのである。

扨てかくして明かに道德的現象の歷史的社會的聯關性が認められた以上は倫理學は單に個人的主觀的な道德意識の事實の分析的考察のみをその基礎或は出發點とすべきではないといふことは直ちに察せられるであらう。倫理學は今迄の個人意識の狹い視野からして廣汎な歷史的社會的現實に眼を轉じてそこで豐富な材料を求めねばならない。かくて「慣習及び習俗に關する現今の盛んな研究は……道德體系の研究の重要なる一分科である」(V. 71) ことを承認せねばならない。デイルタイは「慣習に向けられたる倫理學の分析的基礎づけ auf die Sitten gerichtete analtische

Grundlegung der Moral」(IV 67)の必要を說いてゐる。或は「道德學は法律學や政治學經濟學と同じく實在的對象をもつてゐる、卽ち慣習の世界と歷史とを。是らのもの(慣習)は深い人格的道德意識(それは恒に現今の又國民的に規定せられた敎養圈內にある一人の人のものであるか、然らずとするも尙かゝる意識の抽象的圖式であるかである)と並んで道德の基礎的分析的部門において考察されねばならない、さうして此の廣濶な又確實な基底の上に初めて道德的理想についての崇高な學說が建設せられる」(V. 66)と說いてゐる。

倫理學は此の事を先づ確かに知らねばならない、その事を知ることによつて愈、倫理學は、ディルタイがその基礎づけに生涯を献げたところの所云精神科學中の一分科として數へられることゝなるのである。何となればディルタイによれば歷史的社會的現實在において客觀的に形成されてゐるところの人間精神の產物は文化の體系System der Kultur と呼ばれる、さうして倫理學の對象である道德的現象は今や歷史的社會的な實在として一つの文化體系であることが明かになつたからである。「道德哲學は一つの文化體系についての學である」(I. 58)。「かくして社會において道德の自立的體系が造り上げられる。それは外的强制に向けられてゐる法律の體系

と並んで一種の內的强制をもつて行動を規整する。さうして道德學はかくて個人生活を規則づける命法の單なる總體として精神科學中にその地位を占めてゐるのではなくて、その對象は社會の生活の中にその機能を持つてゐるところの一つの偉大な體系である」(I. 63)と語られるのである。

後のディルタイは斯樣に道德現象の歷史的社會的聯關性を明確に認めることからして、從つて倫理學は左樣な歷史的社會的な實在としての道德的事象についての考察を基礎とせねばならぬと說く。しかし乍ら彼は又他方では後に至る迄、それと共に道德的事實が結局は個人的道德意識においても現れ存してゐることを忘れてはゐない事を注意せねばならぬ。そのわけは思ふに歷史的社會的な道德事實例へば慣習と雖も結局は內的に經驗せられる意識の事實でなくてはならない、さして意識の事實とはつまりは個人的な意識事實であるだらうからである。或は又歷史的認識にとつても尙ディルタイは個人の生活記錄や自序傳をその基礎として重視してゐること(Vgl. I. 34, VII. 199ff. 246ff.)を省みるならば遂に個人意識を離れることを得なかつたことは當然のことであるだらう、そこにディルタイの自己省察の立場があるのであるからである。しかし乍ら倫理學にとつて如何にしても個人の道德意

識を無視し得ない理由は、それの學的使命更にはそれが對象とする道德的事實の性質にその事物的根據をもつてゐると考へられる。何となれば道德的なるものは單に存在してゐる計りのものではなくて働いて存在してゐる筈である、さうして働くとは結局人間によつて、しかも個人の行動によつて或は個人的道德意識に基づいて働くのであるからである。

デイルタイは此のことをも明瞭に說いてゐる、彼によれば道德、或は「道德意識は作用と反作用との限りなく分岐せる働きをなして生命ある全社會を貫き動かしてゐる」(V. 69)のであるが、その働き、作用とは二つの形式においてなされる。卽ち道德的なるものは二種の基本的力 zwei Arten von Grundkräften をもちそれによつて二つの形式において働く、その第一は個人における道德的意識として決して搖ぐことのない良心の根據に基づいて人間行爲を規整し偉大にして以つて生命をして生きる價値あらしめるところの力であり、第二は輿論又は慣習として社會を通じて一樣に客觀的に人間の行動を規整するところの力である。しかし此の二つの形式における道德的なるものゝ働きも結局は第一の個人的道德意識の働きに歸せられる、それだから彼は道德的なるものは第一の個人意識を通じては直接に働くけれ共、第二の社會

的全體良心を通じては個人的道德意識を媒介としてゞある故に唯間接的に働くと說いてゐる（I. 62-63, Vgl. auch V. 70-71）。斯樣に道德的なるもの、又それを對象としそれの原理を考察とするところの倫理學は歷史的社會的聯關性の中にありそれに對つて作用するのではあるが、しかしその作用は恒に個人の道德意識を通じてなされるのである。「精神物理的な個體はそれからして歷史及び社會が建設せられる要素（I. 28）」である。さうして私は此の倫理學は飽く迄個人の道德意識を基礎とし、道德的事象はその社會性にも係らず個人性を脫却することはできないといふ思想において歷史及び社會の道德的生命性を考へたいと思ふのである。デイルタイは道德の歷史的社會的聯關性を說くと共に又地方では歷史及び社會の道德的生命性を說いてゐる。

デイルタイ倫理思想の其後の發展について今迄の叙述で明かとなつたことは次の二つである、卽ち第一、倫理學はその對象たる道德的事實の歷史的社會的聯關性の認識に應じて單に個人的主觀的な道德意識の分析のみならず同時に又、歷史的社會的實在である慣習の分析をもその基礎とする樣に視野を擴張せねばならぬ。第二、道德は個人の道德意識を通じてゞあるが歷史的社會的實在にまで働きかける、從つ

てそれの原理を考察する倫理學も亦單に個人の意志に對しのみならず歴史的社會にも働きかける筈である。これらのことが明かになつた。然らば先に第三にディルタイの倫理思想において本質的なるものとして注意せられたところの思想、實踐的範疇の概念は如何に發展せられたであらうか、それを人は知りたいと思ふであらう。しかし此の概念については其後の上掲の論文においては現れてゐない、從つて又吾々はその概念或はそれと結びついてゐる處の思想即ち道德的諸原理は吾々の生存在の形成形式、吾々の行動の綜合樣式において求められるとの思想についての發展の行方を跡づけることができない。とは云へしかし乍ら上に述べた其の後の發展は當然に此の思想をもより具體的客觀的な方向へ轉回せしめ得る筈であるとは語ることができる。即ち今迄のところで述べた其の後の發展が必然に第三の思想發展の契機をも含むでゐると考へられる。

已に一八六四年の論文も部分的には實踐的範疇の綜合についてそれは「唯に人間精神の本性においてのみならずそれと平行して、社會や國家の形成、貨幣の本性、國民經濟の法則の中にも存する」(VI. 43—44)と說いてゐるが、此の實踐的範疇の客觀的妥當性についての思想は、その後の思想發展に伴つて愈々明白に確實になると考へら

れる。道德的なるものは歷史的社會的な聯關性の裡にあると共に又歷史及び社會が道德的生命によつて形成せられる。ところで歷史及び社會が道德的生命性によつて形成せられるとは、云ひ換へれば實踐的範疇は歷史的社會的實在にも客觀的に妥當するといふことである。卽ち實踐的範疇は單に個人的主觀的な意志に妥當するのみならず、それを通じてゞはあるが又歷史及び社會の客觀界にも妥當するといふことにまで發展され得るのである。上揭一八七五年以後の諸論文において愈、明瞭に說かれたところの上述道德の歷史的社會的聯關性についての認識は恰もこの事に對する形而上學的演釋であり、歷史及び社會の道德的生命性についての認識はその先驗的演釋であると吾々は考へることできないであらうか、できると思ふ。

尤もその前者、卽ち實踐的範疇の歷史社會に對する客觀的妥當性についての形而上學的演釋は今迄に本節で叙述せられた處で達せられたと思ふが、後者卽ちそれについての先驗的演釋の方は今迄の叙述では唯手引が暗示された計りであるとは云はねばならぬ。卽ち實踐的範疇の客觀的妥當性に關する形而上學的演釋は今迄に說かれた道德的事象の歷史的社會的聯關性についての叙述で充分である、それは事實の實證に關はることであるから容易である。困難は先驗的演釋の方にある。さ

うしてそれが見出される筈の歴史及び社會の道德的生命性については吾々は今迄唯極めて僅かしか述べ觸れてゐないのである。しかし乍らそれは止むを得ないことでもあつた、吾々が茲で材料とした上掲一八七〇、八〇年代の諸論文は此のことについて手引の暗示以上には觸れ述べてゐないのであるから。責は考察を狹く準備的なものに限つた叙述者の立場にある。それだから我々は茲ではその手引だけを、卽ち實踐的範疇の客觀的妥當性、或はそれの先驗的根據たるべき歴史及社會の道德的生命性を考へ得る手引だけを上掲の論文に現れてゐる範圍で述べておく事が必要となる。

(一)先にも說かれた樣にディルタイの倫理學において最も基本的な思想であり最も基礎的な概念であるところの此の實踐的範疇の綜合とは、吾々の道德的行爲の行動樣式或は生存在の形成作用である、實在的心理的な生の働く形式である。それだからそれは或る心理學的な形成作用であり、或る種の心理學によつて考察され得る可能性がある、實踐的範疇の客觀的綜合性は先づ第一に心理學的に基礎づけられると豫想することができる。已に一八六四年の論文において倫理學との關係が言及されてゐる、しかしそこでは吾々の生の形成作用を基礎づけるべき特種の心理學が

未だ考へられてゐたかつた爲に次の樣に云はれざるを得なかつた。「心理學的法則は純粹な形式法則である、その法則は人間精神の內容でなくて形式的な態度行動に關はるばかりである、それは人が人間精神を以て一つの詩と見做すならばその詩の云はゞ言語、文章或は韻律の如きものである。それ故に近代の民族心理學派が、歷史及び今迄の人間存在の總計を心理學から、かくて吾々の精神的生命流動の形式についての學問から說明しようと企てたことは誤りである」(VI.43)と。これは唯自然科學的心理學についてのみ云はれることである。もし人間精神に關するそれ以外の新らしい心理學が組織せられ存在するならばそれは倫理學の基礎づけ、生形成の原理の基礎づけにとつて必要にして有效と云はれる筈である。(さうして後にはディルタイ自身が人間精神の內容的構造、生の形成作用の法則を探求すべきかゝる新らしい心理學を計畫組織したのであつた)。一八七五年の論文は已に人間精神についての研究が道德的理想の構成にとつて關係深いことを說いてゐる(Vgl. V. 67, 70)。

「序論」においては一般に精神科學の一つの基礎をなすものとして先ずかゝる新しい意味における心理學的認識が要求せられてゐる(z. B. I. 32)。さうして實際一八八八年の敎育學についての論文は、倫理學と密接な關係に立つ敎育學においてその

普遍妥當的な敎育原理を導出する爲に「敎育の規範の體系を可能ならしめる心的生活の特性」(VI.62)の考察を基礎としてゐる。さうして此の時代においては已にその精神、その生とは歷史的社會的實在の中におけるその構成要素として明かに認められてゐたのである。それだからして吾々はまづ第一に想望することができよう、歷史社會の構成要素としての吾々の生或は精神生活の所謂構造心理學的考察において、歷史及び社會の道德的生命性、實踐的活動性が明かとなるであらう。さうしてそれによつてかの實踐的範疇の歷史的社會的實在に對する客觀的妥當性が基礎づけられるであらうと。之れが實踐的範疇の概念の新らしき可能的發展に對する第一の手引である。

(二)精神科學序論においては一般に精神科學の基礎づけをなすものとして心理學とその外に人間學Anthropologieが說かれて居り(I. 32, 114)、更に後の論文においては解釋學Hermeneutikが說かれてゐる。その前者による基礎づけはディルタイによつて實行せられてはゐないが、後者による精神科學的認識の基礎づけは後に至るほど重視されてゐる。吾々はディルタイの特に全集第七卷において之らの基礎づけを精神科學中の一分科である倫理學にも適用してゐる企てを辿ることできないであ

らうか。さうしてそれから學ぶことによつて卽ち歷史的社會的な表現をとる道德現象の裡に働いてゐる生の形成作用を理解することによつて倫理學の或は廣く實踐哲學の新らしい展望を開示されることないであらうか。之れが第二の手引に對する暗示であると考へられる。

ディルタイの倫理學において最も基本的な概念である實踐的範疇の可能的發展に對して、今迄のところで推察想望せられる手引として之れだけの事を吾々は述べておかねばならぬ。さうして吾々は「人が一方では人間學及び歷史と他方では道德學との間の境界のある點に目を留めて考究することによつて、人間性と歷史との研究と倫理學的理想の構成との結合點が觀られ得るに至るだらう」(V. 67 u. 70.)と云ふてゐる言葉を茲に引用しておかう。

以上で初めに約束せられた主要な思想發展についての叙述は一先づ終つた、最後に吾々は一八八八年の敎育學に關する論文に現れてゐる思想を述べておかう。それは何であるか——先に道德について繰返し說かれたところの歷史的社會的聯關性が茲では更に「一步を進めて倫理學それ自身についても語られるに至つたとふ事いである。單に道德的現象のみならず「哲學者が最高善として語る」ものも亦「唯歷史

の產出物に對する言葉であり、歷史的生の全內容によつて制約されたものである」。(VI. 59)從つて又「倫理學は人生の目的を普遍妥當的に規定することはできない、それは已に道德學の歷史からして知られることである、人間とは何であり又何を欲するかを人は幾千年を通じての彼の本質の發展においてのみ初めて經驗する、決して終局的に普遍妥當的に知ることはない……。それに對して人生の究極目的に關する各々の內容的命題は歷史的に制約されてゐる、嘗て如何なる道德體系も普遍妥當的是認に達し得なかつた」(VI. 57)。道德がさうであると同じく倫理學も亦一方では先述の如く歷史と社會とを導き動かすべきであり乍ら――或はその故にこそ――他方では又それ自身が歷史的社會的に制約されてゐる。道德の歷史的社會的聯關と同じくそれを對象とする學問としての倫理學も亦歷史的社會的に制約されてゐるといふのである。さうしてその歷史的被制約性の故に實に倫理學の普遍妥當性 Allgemeingültigkeit が疑はれるのである。

尤も之れに共通な思想は已にそれより以前にも現れてゐる、例へば一八六四年の論文は現實の倫理學諸體系は道德意識のそれ〴〵異つた一面のみを云ひ現はす、それだから如何なる倫理學說も倫理學の全體としてゞはなくて唯部分として認めら

るべく各々が相互に補はねばならぬと云ひ（VI. 29）、一八七五年の論文も諸々の倫理學はその歴史的制約の故に凡て一面的であり眞理の一部を含むだけであることを注意してゐる（V. 73）。しかし一八八八年においては今迄は尙普遍妥當的な倫理學の對象たるべきものとして考へられてゐた道德の客觀的體系 objektive System der Sittlichkeit（V. 72, 73）或は道德の理想體系 Idealsystem（I. 61）の概念さえもが次の樣にして消去されるのである、卽ち學としての倫理學にとつて根本的な任務であるところの道德的諸原理を「全體に結合することは恒にそれの解釋 Interpretation である、さうしてかゝる解釋は道德的理想或は體系として歴史的に制約され制限されてゐる」（VI. 57）と。茲では理想體系の概念に解釋の概念が取つて代り倫理學の基礎が殘りなく歴史的相對性の中に押し流されるのである。さうして學としての倫理學の普遍妥當性はそれの歴史的被制約性の故にかくして一應否定せられたかに觀える。然らば倫理學はどうなるか、人は之れに對して如何に考へたらいゝか。

ディルタイは敎育學についても之れと同じくその敎育原理の歴史的被制約性相對性を說く。しかし乍ら敎育學に對してはそれが先にも述べた人間の心的生活についての心理學的考察を基礎とすることにより普遍妥當的に成立し得ることを認

めてゐる（VI. 62ff. 69, bes.67）。もし教育學にして普遍妥當的に成立可能なりとすれば之れと極めて親近の關係にある倫理學において不可能なりとする何らの理由も無い。實際又、ディルタイの眞意も、倫理學はその原理と體系との歴史的相對性にも係らず先に推察想望せられた樣な心理學的人間學的解釋學的などのそれに適はしい基礎づけさへ與へられたならば普遍妥當的に成立可能なりとするにあつた、唯彼は教育學におけるが如く倫理學についてはかゝる基礎づけをしなかつたゞけであると考へられる。それだから一層倫理學をその歴史的相對性にも係らず普遍妥當的に基礎づけることが吾々の任務として迫り來るのである。期樣に考へられる。

かくして吾々の次のより重大な問題はディルタイにおいて一般に實踐的なるものゝ構造を、或は生の哲學、全精神科學との關聯における實踐哲學の基礎をより廣き立場から考究すること、さうしてそれによつて歴史的社會的聯關の中にある倫理學の根據づけを學ぶことである。茲ではそれへの準備が企てられたに過ぎない。